オペラシアター
こんにゃく座鈴鹿公演

オペラ 森は生きている

PHOTO 青木司

新しい年を迎える大晦日、わがままな女王が、四月に咲くマツユキ草がほしいと言い出したために、国中は大さわぎ。ほうびの金貨に目がくらむ継母のいいつけで、マツユキ草を採ってくるようにと一人の娘が真っ暗な森に追いやられます。 そこでは十二月の精たちがたき火を囲んで新年の儀式の最中でした。娘の話を聞いた四月の精は、他の月たちに頼んで一時間だけ「時」をゆずってもらいます。娘はマツユキ草を手に入れましたが、それを渡された女王は、自らマツユキ草を摘むために吹雪の森へと出かけます。しかし、そこで待ちうけていたものは・・・

アンケートより

●感動の大きさがあまりにも巨大すぎて、始まりの瞬間からこれから何がおこるのだろうとわくわくしっぱなしです。●物語の奥底に秘められた神秘をギャグとうまく芸術にされていてすばらしいです。●マツユキ草の出現するシーンが特に印象深いです。生命の輝きのようでした。自然に会いに行きたくなりました。●新しい年のはじめに素晴らしい贈り物を頂いた気分です。改めて、自然や人の心など色々なものを大切にする気持ちを思い出させてもらいました。●人間に対する警告。森の幻想の世界に引き込まれた。澄んだ声に心が洗われた。

公演評より

●こんにゃく座の代表的なレパートリーの一つであるばかりではなく、児童劇にもとづくオペラとしては、疑いもなく最高傑作のひとつと呼んでもよいものであろう。髙瀬の演出は、大筋において手際もよいが、明るい色彩感がひとつの特質をもなしている。それによって、おそらくこのドラマがもたらす教訓や論理は、いっそう聴衆にしみ込んでゆくものと思われる（「演劇と教育」2005 年 4 月号）

●爽やかな舞台に快活な音楽が響いた。人間の傲慢さを物笑い大自然を賛歌するこんにゃく座メッセージは健在。（「音楽現代」2005 年 3 月号）

オペラシアターこんにゃく座

オペラシアターこんにゃく座は、［新しい日本のオペラの創造と普及］を目的に掲げ、1971 年に創立された。母体となったのは、東京芸術大学内で 1965 年から 12 年間にわたって活動が続いた学生たちのサークル「こんにゃく体操クラブ」である。このクラブでは、故宮川睦子氏（元東京芸術大学名誉教授）指導のもとに、身体訓練と演技の基礎訓練が行われた。この「こんにゃく体操クラブ」出身者たちにより、自国語のオペラ作品をレパートリーとし、恒常的にオペラを上演する専門のオペラ劇団としてオペラシアターこんにゃく座は設立され、巡回公演を開始した。日本にオペラが紹介されてから今日に至るまで、日本では、ヨーロッパで通用するオペラ歌手の育成に力を注いできている。その結果、日本語を歌う技術がなおざりにされ、観客は聞き取れない日本語の歌を聞かされ続けている。そのなかで、こんにゃく座はよく聞き取れる、すなわち内容の伝わる歌唱表現を獲得することを、創立当初からの目的とし、その成果は各方面からの評価を得るに至っている。こんにゃく座はまた、オペラの演劇性を重視し、こんにゃく体操で培われた身体性を駆使し、演出面にも斬新な発想を提示し続けている。そして大掛かりなグランド・オペラの方向はとらず、ピアノのみ、あるいは小編成のアンサンブルの演奏と少人数の出演者による作品を創作し、数多くの上演を重ねてきている。現在こんにゃく座は、林光を芸術監督、萩京子を音楽監督とし、歌手 33 名を擁し、年間約 250 公演の上演活動を続けている。

※オペラシアターこんにゃく座ホームページより引用　URL http://www.konnyakuza.com/index.aspx